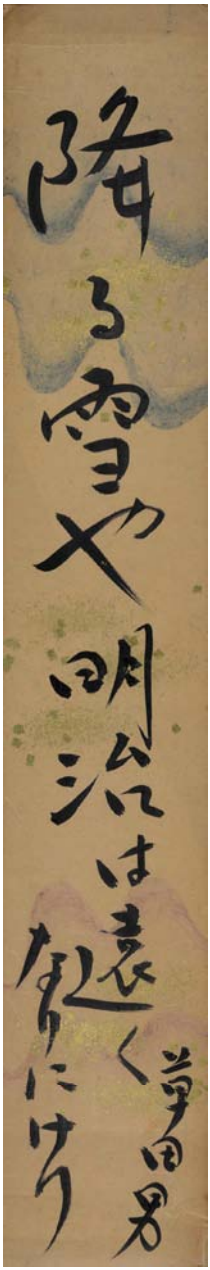
あさ 12

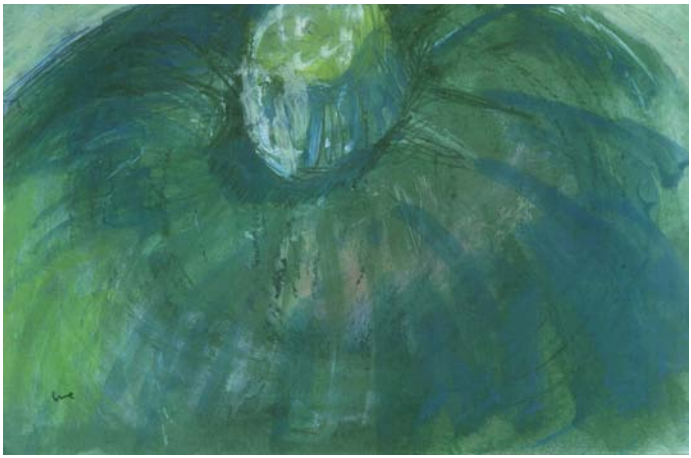
2008



降る雪や明治は遠くなりにけり　中村草田男

あと

十　二　月



枇杷の花

本三宮前　佐藤喜孝

飛ぶ鳥の脚の始末に秋の艸
草市や繩文びとほどの足算
蟲の秋五叉路のひとつ上り坂
朝の蟲高く重ぬる乱れ籠
金言のごとくにひらく枇杷の花

歩道橋

田端　田中藤穂

言はざりし悔一つありとろろ汁
ぬるき湯に身をゆだねをり十三夜
秋の雨子と渡る夜の歩道橋
蠟色の夜明け秋思の椅子に在り
金剛の吽像夫似秋浅し

白金　東亜未

秋うらら靴只今といふかたち
中秋や伽羅の苦（にがみ）の立ちてきし
瞬く間糸を纏める女郎蜘蛛
うまいこと描くな舞ふな秋深し
忽然と猿をりテラスに柿喰らふ

四日市　長崎桂子

豊　饒

青テント秋の稔りの収穫祭
さつまいも土にまみれて積まれをる
稲藁で縛られてをる秋野菜
新米の窮まりし白にぎりめし
秋うらら自動装置のやさしさ怖さ

朝の日や石榴の紅を磨き上ぐ
寂かなり雲離れゆく十三夜
いたいたし風吹くたびの破れ芭蕉
法要の読経にわたる秋の風
新米の献納受ける大黒天

さいたま　早崎泰江

秋燈下再びといふ難問題
紅葉狩先づは写経の墨をする
身に入むや面相小筆ままならぬ
乗る並ぶ走るディズニーランド秋
ディズニーのパレード絢爛秋日落つ

町屋　藤野寿子

牛歩

新宿　堀内一郎

愛子さまは七歳厳と冬の朝
木守柿離ればなれに急がぬ村
一陽来復底ぬけと言ふ空がある
悪縁や以心伝心風邪夫婦
直に春牛歩の道もとほからず

新宿　森山のりこ

秋の夜やふとすれ違ふシャネルの香
満月を見上げ思はず手を合はす
万歩計着けて爽やか野草園
コスモスや石窯で焼くピザ厚し
口切や香りたしかむ躙り口

百匁柿

よろこびは胡麻ぎっしりの百匁柿
大蟷螂眼は真緑に小町針
ふるるんとふるるんと揺れ野紺菊
化粧塩気高き面を秋の鮎
木洩れ日や蜘蛛の糸消す紅葉渓

上高田　森　理和

十三夜

十三夜横紋筋はそつとして
遅れ癖今もつづきて十三夜
十三夜何とはなしの立話
天雲のうしろにうごく十三夜
子の影を踏みて佃の十三夜

本三宮前　吉弘恭子

清瀬　赤座典子

待つほどに白蝶貝の後の月
朝寒の手の甲からの目覚めかな
秋日和重たき柿の揺れ止まず
「男前」あてこ爽やか巻毛の子
大河ドラマのまことしやかや冬隣

桜ヶ丘　安部里子

秋の雲

ゴッホの絵に猫は永遠秋日和
トランプの億万長者夜食とる
ケータイがカノン奏づる秋刀魚焼く
秋遍路今ゆかねばの何時も今
マーラーや秋空昇る音の道

理不尽もさらりと受けて秋日和

鍵かけぬ村の小高に木守柿

そぞろ寒監視カメラの目と目と目

高速道路紅葉の山を袈裟懸けに

秋日和寝釈迦とひと日肘腕

向島　遠藤　実

雨雲やたちまちにして坂洗ふ

耳鳴りか地虫が鳴くか闇の中

終日を籠りし夜よ地虫鳴く

月涼し拠所なき憂さ捨てむ

枯蔓を引いて力のなさを知る

逗子　鎌倉喜久恵

總持寺

川崎　木村茂登子

諸なんきん胡麻豆腐ほか朱の御膳
緒嶽山總持寺くまなく秋日和
金鶏門虫雀門玉兎門秋深し
落葉踏む長き石段鐘楼へ
坐してゐるだけで癒され秋の寺

秋の蝶

白金　斉藤裕子

胎動ありて蛹化始める秋の蝶
秋の蝶今日は蛹となりし朝
妙なるや脱皮始むる秋の蝶
羽化したる秋蝶休らふ下枝かな
羽化するも容易くはなし秋の蝶

総持寺

大寺のまづ常夜燈秋闌ける
山門に人湧きて来て銀杏の香
てらてらと百間廊下萩の風
さはやかな合掌の指青つむり
雑巾がけの猪突猛進秋の寺

銀座　篠田純子

ねこじやらし猫にそつぽを向かれけり
敬老日長生きをしてさびしかり
青春は戦の最中葛の花
さばさばと浪費してをり秋扇
身の内に思ひふくらむむかご飯

千駄木　芝尚子

宝泉寺前　芝宮須磨子

ボジョレヌーボー

言の葉の伝はりがたく秋日落つ
万歩計ポケットに入れ秋日和
甲州のボジョレーヌーボー友来る
その人に合はせた話題秋深む
浜町で芝居見物秋袷

輪島　定梶じょう

遥かにおろしゃ

ムハンマド仏陀キリシト一葉落ち
新仮名やさういふわけで蚯蚓鳴く
あの向かう遥かにおろしゃ落穂かな
訃が続く曼珠沙華また曼珠沙華
瓢箪やむかしむかしあるところに

所沢　須賀敏子

秋祭見馴れぬ男ばかりなり
秋祭山車の狐はお兄ちゃん
谷川岳ゴンドラからの薄紅葉
供花持つ人と二人に秋のバス
宰相は一年ごとかうすら寒

本三西　鈴木多枝子

手を替へて墨磨りおろす十三夜
気がつけば背筋曲りし木の実落つ
振り向けば猫と目が合ひ秋寒し
新しき草履を帯に秋祭
樹の上で山桃食べし波の音

秋祭見馴れぬ男ばかりなり
秋祭山車の狐はお兄ちゃん
谷川岳ゴンドラからの薄紅葉
供花持つ人と二人に秋のバス
宰相は一年ごとかうすら寒

須賀敏子

手を替へて墨磨りおろす十三夜
気がつけば背筋曲りし木の実落つ
振り向けば猫と目が合ひ秋寒し
新しき草履を帯に秋祭
樹の上で山桃食べし波の音

鈴木多枝子

白瓜

浦和　竹内弘子

父母祖父母なし白瓜の雷干し

道具市かがみて膝の冷ゆるまで

秋天や小さくなりし体操着

横文字のカードが届く十一月

薄もみぢ長き廊下に散り込める

特別作品鑑賞　善福寺川緑地　田中　藤穂

佐藤喜孝

沼杉の丸き実たわわ雨涼し

八月末に訪れた杉並・阿佐ヶ谷公団住宅の吟行会での成果。あらためて季節の廻るはやさにどきつとした。

沼杉の別称は落羽松。ずんと抜きんでた高さ、葉の繊細さに会ふたびにほれぼれと見上げる。「たわわ」は柿の実には常套句だが、あまたの青い実が雨中に垂下がつてゐるさまを「雨涼し」が適確に把握してゐる。

初秋の川ここからは真っすぐに

初秋にかなふ爽快な句。ここからはとあるからはいままではまつすぐではなかった川、あとは河口まで一瀉千里、といふ趣がある。あとは読者の詠みにまかせませう。すがすがしい特作であつた。

一人一句

八月が澤山ありぬまだなかば　佐藤喜孝

夫といふ不思議なるひと暮の秋　竹内弘子

秋祭少年に髭生えそめし　田中藤穂

人間が一番怖い胡蜂　東亜未

赤とんぼ出水のあとに戻りけり　長崎桂子

土手道の小さき踏切曼珠沙華　早崎泰江

秋終るいよいよ恋のあきらかに　堀内一郎

不揃ひの羅漢竝びぬ菊日和　森山のりこ

寝転んで少し近づく星月夜　森　理和

椎の実の鬱蒼として男坂　吉成美代子

少年に凭れ電車の熟寝かな　吉弘恭子

虫鳴いて障子隅まで蒼き夜ぞ　渡邉友七

前月作品

濡れそぼつ藁塚の早色失せる　赤座典子
冬瓜の四つ割にされ店先に　安部里子
かなかなや疎開の村に道の駅　遠藤実
青空をくっきり切って曼珠沙華　鎌倉喜久恵
まんじゆしやげ或日突然曼珠沙華　木村茂登子
嫁終へて母と語らふ夜長かな　斉藤裕子
観音とマリアと在す草の花　篠田純子
まんまるの月のかなしみふところに　芝尚子
黒猫が斜にかまへて秋の雨　芝宮須磨子
秋来ぬと目に電柱の足掛かり　定梶じょう
上野より鶯谷へ秋日傘　須賀敏子
茅花原逝きたる人に逢へさうな　鈴木多枝子

抄　喜孝

十一月作品より

田中藤穂

八月が澤山ありぬまだなかば　　佐藤喜孝

八月と言うと、私達戦争を経験した世代にとっては、どうしても原爆とか敗戦、降伏とか占領、焼跡、そんなイメージしか浮んでこない。以前短歌で〝八月はわれに永久に喪の月〟などと詠んだ記憶もある。しかし、喜孝氏の句を見てはっとした。

考えれば、子供の時に親に連れていってもらった海の思い出も八月だ。九月号に書いた父の村への帰郷も夏休の八月が主だった。結婚してから子供達と一緒に行った数々の旅行も、八月だった。よい八月も確かにあったのだ。主人が亡くなる時、六月から十月初めまで入院していた。あの年も暑い夏だったが、私は夢中で病院通いをした。そんな八月もあった。思えば沢山のいろいろな八月を経てきたのである。これからもまた、いろんな八月に出遇うわけである。どうぞ地球の上に、大きな不幸がなく、みんながよい八月を迎えられますように……

この一句が私に、沢山のいろいろな八月を思い出させて下さったことを感謝します。

夫といふ不思議なるひと暮の秋　　竹内弘子

戦前と違って、今の人は顔も見ずに夫婦になる人は先ずいないでしょうが、大人になってある日縁があって夫と妻になり、以後は同じ屋根の下で共同生活を送ることになる。やがて子供が生まれ、子育て、進学、就職、結婚など、楽しみも苦しみもあり、そのうち愛する子らも巣立って、もとの二人になる。

夫婦はこの世の中で一番気の置けない仲とも思える。だが年を取ると、だんだん空気か水のような存在になって、よその人には愛想もいい

のに、妻や、或は夫には口数も少なくなって、それでも一つ家の中で毎日を過ごす。空気のようだが、なくてはならぬ存在ではある。それは失ってみた時に、そのあまりに大きな存在がわかるのです。

弘子さんも、夫という不思議なる人と思いながら、〝さうめん〟を茹でて「出来ましたよー」なんて二階に声をかけている。それが夫婦でそれが家庭なのだ。ご主人ご存命の方は、せいぜいお二人の暮しを楽しんで頂きたい。それにしても本当に夫とは不思議な人ですね。木々は葉を散らし吹く風も蕭々たる秋の末です。弘子さんから、この句のいろいろを伺ってみたいものです。

舗装路の小川となりし秋出水　　長崎桂子

今年は夏も秋も気候が変でした。東京でも雷が落ちたり、一部に大夕立が降って平常は水など出ない場所が水に浸かったりしました。中野坂上の広い交差点の辺りも、急の大雨で冠水したとか、信じられない事です。桂子さんの住んでいらっしゃる四日市でもそういうことがあったのでしょう。この句は今年の異常気象のよい記録となるでしょう。

コンバイン稲の香を残しをり　　早崎泰江

気持のよい句ですね。稲を刈り取ったコンバインに稲の香りが残っているという。実りの秋のすがすがしい情景が伝わってきます。

小さき旅ズボンに止まる小蟷螂　　森山のりこ

大きなカマキリに止られたらぎょっとしますが、小蟷螂となると、のりこさんは可愛らしく思っていられるように思います。

小さな旅の中のちょっとした事をとらえて旅の楽しさがうかがわれます。

大花野少年ひとり風を待つ　　森　理和

秋草の花の咲き乱れる広い野原に、少年はひとり立って風を待っている。少年は紙飛行機を飛ばすのでも凧を上げるのでもないようだ。少

年は何の風を待っているのだろう。
自分を乗せて舞い上る風か？
不思議な夢のある一句です。

初秋刀魚鮨屋の背の丸くなり　赤座典子

初秋刀魚が出たのでお鮨屋に食べに行ったら、握ってくれている鮨屋の板前が、ふと気が付くと背がちょっと丸くなった様に思う。テレビの中の歌手やタレントでも、ふっと、年をとったなと感じることがある。年は誰もみな一緒にとってゆくので万止むをえないことなのだが、鮨屋の背にそれを感じたというところが面白く、軽い哀愁も漂うのである。
はじめ、初秋刀魚と鮨が少しつきすぎではないかと思いましたが、活きのよい初秋刀魚の一直線にぴんと張った姿と、丸くなった鮨屋の背との対比がなかなか味があると思いなおしました。

かなかなや疎開の村に道の駅　遠藤実

道の駅というのに一度行ってみたいと思っている。実さんは戦争の時に疎開した村があるのだ。きっとまだ子供時代で、でもそれなりに辛い思い出や楽しい思い出が沢山ある村だと思います。そこにこの頃流行の道の駅が出来て、その土地でとれた新鮮な野菜や、手作りのお饅頭やジャムなど一杯並んで、多分三度のご飯にも事欠いた辛かった疎開の頃とは隔世の感を感じておられるのでしょう。
かなかなの声が、いろいろな思い出を手繰り寄せて、歳月の経過や世の変遷をしみじみと感じていらっしゃるのでしょう。かなかなという季語がとてもよい効果を出していると思います。

秋扇親しき人は遠くゐて
吾亦紅人知れずいま花になる　鎌倉喜久恵

この二句はいつもの喜久恵さんの緻密で写実的な句柄とちょっと違っている。どこかに源氏物語のような雰囲気が漂う。

秋扇は、秋になって顧みられなくなった扇、また残暑の候なお用いている扇、また古来寵を失った婦人に譬えていると、山本憲吉の歳時記に出ている。

吾亦紅は秋の野に咲く花。花といっても花弁はなく、枝の先に桑の実のような赤い丸い花を点々とつける。あの紅紫色は大変凝った美しい色で、ひっそりと何気なく野の風の中に立ちながら、野趣の中に気高ささえ感じさせる。吾木香という字もあるが、俳人の多くは吾亦紅という字の方が好きのようである。いう誰がこんな意味深い字に変えたのか。

この二句で小説がかけそうだ。鎌倉さんの奥の深さを垣間見せられた二句である。ムードたっぷりだが、やはり緻密で喜久恵さんの自信作だと思う。

嫁終へて母と語らふ夜長かな　　斉藤裕子

裕子さんは長いことお姑様と御一緒にお暮しのようでした。先頃お姑様を見送られて、嫁としてのおつとめを無事終えられ、ほっとなさったところです。御自分のお母様は遠く九州にいらっしゃると伺いました。これまでは、お姑様の介護という責任を抱えられて入らしたので、実家のお母様とゆっくり語り合ったり日を過したりする余裕はなかったのだと思います。今は、ゆっくりと心置きなくお母様と語り合う時間がもてるようになった喜びが伝わってきます。

この一句には長い長い時間が詠みこまれています。

秋扇いつも会議は少数派　　篠田純子

純子さんはその名のように純粋で、正義派で、はっきりと発言なさるから、保身派や、なあなあ派の多い会議では、いつも少数派になるのでしょうと思います。

秋扇が効いています。ちょっと不満、そんな中で一句ものしてしまうのが、若い純子さんの活力です。社会の現場にいなければ出来ない句で、羨ましい気も致します。

近世俳諧と漢詩文 2　拾四

王岩

一片氷心

涼しさになくなりさうなこゝろ哉　　子功

この句は文化八年(一八一一)版『見物塚記』(一瓢編)に見える。作者の子功については詳しく分からないが、句前の「一片氷心」は『唐詩選』に載る王昌齢の七絶「芙蓉楼送辛漸（芙蓉楼にて辛漸を送る）」の結句に由来した句題である。

寒雨連江夜入呉、　寒雨　江に連なって　夜　呉に入る
平明送客楚山孤。　平明　客を送って　楚山孤なり
洛陽親友如相問、　洛陽の親友　如し相問はば
一片氷心在玉壺。　一片の氷心　玉壺に有りと

王昌齢の七絶は秀逸な送別の詩として広く知られる。呉（現在の南京）の地方官吏に左遷された王昌齢は、洛陽へ帰る友人の辛漸を、大雨の中、下流の鎮江市まで見送り、夜通し芙蓉楼で送別の宴を開いた。話は尽きなく別れの杯を酌み交わすうちに、いつの間にか夜が明けた。いよいよ友人の辛漸と別れの時がくると、雨も止んで、楚の山はぽつねん姿を現した。「もし、洛陽の友人が、王昌齢はどうしているかと訪ねたら、我が心は玉壷に納めた一片の氷のように清く澄み切って微塵も世塵に染まっていないと告げてくれ」と辛漸に伝えた。この詩意は現在の一般的な解説であるが、南郭は『唐詩選国字解』の中で、この詩の結句について次のように解釈している。

「一片の氷心」とは、世の中に望みは絶へきったを云ふ。……むかし都にいた時は、功名富貴をも頼みにしたが、今は吾が一片の心が玉壷の氷の如くさっぱりとして、世を棄て、功名富貴を願ふ処存はないから、もう都へ行く気はなくなったと云うてくれられい（注）。

子功の句前における「一片氷心」は、恐らく南郭的に享受したのであろう。彼は塵世を遠く離れて涼むと、功名心は少しずつ消えていくという俳味溢れる筆触で描いて、齷齪せずに悠然として涼味を満喫できる今こそ最高だよと声高に唱えた。

王昌齢が南朝宋の詩人鮑照の「直きこと朱糸の縄の如く、清きこと玉壷の氷の如し」（白頭吟）という表現を借りて詠んだ「一片氷心在玉壷」は、時空のトンネルを超えて子功の俳諧に継承されている。

注：服部南郭『唐詩選国字解』３（日野龍夫氏校注　平凡社　１９８２年３月19日）１３８頁

あをかき集

竹内弘子選

（六人目以降五十音順）

敷布干す白きに秋の潮ひびき　定梶じょう
上げ汐の艫綱巻けよ十三夜
月光の音かも倦まず藁砧
銀杏や神ならぬ身のつむりに降る
晩秋の長き汀へ歩み入る
秋の帆や茜のなかを帰り来る　鎌倉喜久恵
浄土からはないちもんめ秋彼岸
寺の鐘暮六ツ報じ報じ月白し
芒折り振りつつ山を下りにけり
名残茄子露地の一隅いろどれり
気散じの枯葉の道を行き帰り　吉弘　恭子
月に星重なるやうに雲ながれ

星の飛ぶ後の空気のさえざえと
冬空の青きを見惚る喉仏
馬手に箸豊葦原の新米喰ふ　田中　藤穂
徘徊でないぞ木犀見にゆくと
屈託のなしとは言へず秋袷
木の実降る精進料理朱塗椀
鯖雲や網目のやうに人の縁
菩提子の生りゐて届かざる高さ
つづれさせひと匙づつの看取かな　篠田　純子
つまらない花おもしろい花小鳥くる
ゐのころの枯赤ん坊のうぶ毛かな
秋ついり東京タワーの赤き脚
太宰府へ飛行機で行く秋曇　森山のりこ
谷川を間近に秋の雲流る
花マップ手にゆっくりと秋探す
鳥兜なぜか恐ろし園の径
野草園一株残る風露草
吊し柿蔵の窓から蔵の屋根　森　理和

一位の実氏神様に人気無く　赤座　典子
轟音の滝裏からの巌紅葉
天ぷらの衣を纏ふ山紅葉
銀杏匂ふ参道の果て四脚門
熟るるを待つ土塊めけるラ・フランス
郁子の実や一人居の部屋灯で飾る
くるくると紅の縁取り菊垂る
あらためて沈黙枇杷の花　安部　里子
秋の空ヘリ編隊の汚しゆく
猫がゐる十月のホットカーペット
一杖の慈顔の媼落花生　遠藤　実
リハビリの靴の片減り月の暈
空をほめ干柿作る割烹着
秋刀魚焼くけむりも出さず文化の日
幕の間を立つとて置きし秋扇　木村茂登子
雨戸閉づ音しめやかに十三夜
木の香たて大根砕く鬼おろし
名も知らぬものもごったに菌汁

安らぐや秋の蝶みな飛び立ちて　斉藤　裕子
門の外に手を合はせをり母の友
初咲きを母に供へる黄の小菊
足だけを夫に添はせる夜寒かな
細ぼそと水引の花塀に添ふ　芝　尚子
栗鼠走る谷中寺町菊祭
振り返るほど生きてをり青木の実
短日やスクランブルの交差点
認知症てふ魔物が潜む敬老の日　芝宮須磨子
仏縁の風通り抜け爽やかに
すずかけの枝打ち進み秋日和
堂塔に唱名みちて彼岸花
図書館や釣瓶落しを気にしつつ　須賀　敏子
「熊危険」立札の先紅葉映ゆ
鶏頭の畑を縁取る赤さかな
お目当はサンバパレード秋祭
稲光浴びて五感の冴え冴えと　鈴木多枝子
逝きし人にも逢へさうな芒原

無花果を食はず嫌ひで通しけり
四五本はどこの墓にも彼岸花

總持寺の迷路を巡る秋の鐘　東　亜　未
賽銭のコロコロカラン秋静か
木版に槌穴深しこぼれ萩
つるつるの百間廊下秋日さす
標とす小さきプリズム露の径　長崎　桂子
袖口と裾に露受く今日の晴
思ひ出す絆の顔や後の月
お供へに一日暮たり後の月
にぎやかに雀の潜る蕎麦の花　早崎　泰江
木犀の香りたっぷり窓の猫
灯が川面にゆらす秋の夜
大寺の山門くぐる落葉かな
ノーベル賞蛍光たんぱく秋燈下　藤野　寿子
神の留守おわんくらげよなぜ光る
オワンクラゲ秋冷八十五万匹
神無月内助の功賞聞きたき夜

選ををへて

銀杏や神ならぬ身のつむりに降る　じょう

つい先頃、福井の永平寺につぐ曹洞宗の大本山、鶴見の総持寺へ吟行した折、寺院の入口を入ってすぐ、一本の銀杏の実を落しているところに出会わして、一握ほど二重に包んで持ち歩いたが、辛抱たまらず手放した。

然く、悪魔的臭気の銀杏の実が「つむり」に降ったとは。失礼ながら俳諧そのものです。

他に〈上げ汐の艫綱巻けよ十三夜〉〈月光の音か

も倦まず藁砧〉など、詩的味わいの濃い作品に惹かれました。

浄土から花いちもんめ秋彼岸　　**喜久恵**

昨年、百五歳で永眠された母上を、ずっと看取っておられた。母上の腕を令妹と片方づつ持って湯槽に入れてあげたそうです。母上は足をちぢめておられたそうです。

秋のお彼岸は、そのお母さまが〝花いちもんめ〟と歌いながら浄土からお見えになったのです。

気散じの枯葉の道を行き帰り　　**恭子**

「気散じ」をせねば、気持の整理がつかないことは誰にもありますが、結果的にはウオーキングを兼ねている所定の道かもしれませんね。季節によって受取りかたも違うでしょう。熟（こな）すべき一日の仕事が多岐にわたっているので、慣れたこととはいえ、遣り場のない気分にもなると思います。〈月に星重なるやうに雲ながれ〉〈星の飛ぶ後の空気のさえざえと〉

地上の些事を洗い流してくれるような、澄みきった二句です。

鯖雲や網目のやうに人の縁　　**藤穂**
屈託のなしとは言へず秋袷

芥川龍之介が晩年住んでいた田端駅に近い高台に、戦後まもなく嫁いで来られ、焼跡に野菜を作られたことは以前にも書きました。

「暖流」の谷中句会が近くの長久院にあって、そこで御一緒して以来ですから三十年くらいになります。人を包み込むような温顔でご近所の方やお友達を迎え入れたことと想像出来る。その上俳句をやっていることですし。いつの間にか編目のように人の縁が広がっていったのでしょう。私は俳句のご縁に繋がる一人です。

秋ついり東京タワーの赤き脚　　**純子**

東京に生れて東京タワーに上ったことがない。高いところが苦手なのである。稀に飛行機に乗るとすぐ安定剤をのんで眠ってしまう。

芝公園に東京タワーが立ったのは五十年くらい前のこと。すこし後の新幹線と共に高度経済成長の象徴のようで大人気だった。

たまに東京のレストランで食事していると、遮るものさえなければ何処からでも見える。雨に濡れたタワーの赤い脚がひときわ鮮やか。〈ゑのころの枯赤ん坊のうぶ毛かな〉もいい。

野草園一株残る風露草　　**のりこ**

もと『暖流』の谷中句会で先輩だった方。

茶の湯のお師匠さんをしておられ「風露草」はそのころ出版された句集の題名だったと思う。句会にきれいな花を持って来られて、花にお詳しいので、或は華道の先生もしておられたかもしれません。掌状にひらいた葉に紅紫色の五弁の美しい花をつけます。作者の句集名で覚えた花の名です。

湯けむりと冷気渦巻く天の川　　**理和**

他の句を考え合せると、紅葉をめでながら山の温泉場で露天風呂に浸って入る感じです。

「カフェ傳」のお休みに合わせて、一日、御家族とお出かけになったのでしょうか。

山の出湯に浸って満天を見上げている。山の冷気がこちらに伝わってくるようです。

熟るを待つ土塊めけるラ・フランス　　**典子**

芳香と上品な甘さは、他の果物に劣らないが、見た目はゴツゴツして「土塊のようだ。

リハビリの靴の片減り月の暈　　**実**

治療を終えた疾病などの機能回復のため、医学的

指導を受けに行く「リハビリ」。歩いて通院出来るのですから傍目には分りませんが、「靴の片減り」や「月の暈」に、やや鬱屈気味であることがうかがえます。

雨戸閉づ音しめやかに十三夜　　**茂登子**

「しめやか」という雅語が生かされていると思いました。「豆名月」「栗名月」ともいう月見の行事。醍醐天皇(延喜19)の月見の宴に始るといわれます。八月の十五夜に対して九月十三夜が「後の月」です。

初咲き母に供へる黄の小菊　　**裕子**

「黄の小菊」が清らかで愛らしい感じ。長逝された御母堂がしのばれます。大振りな花束よりさっぱりしていてすてきです。

振り返るほど生きてをり青木の実　　**尚子**

この句は偏に尚子さんがご長寿だということの証左ではないかと思います。「青木の実」は青い葉に真っ赤な実をつけた、東京によくある庭木です。魅力的な面白い句と思いました。

認知症てふ魔物が潜む敬老の日　　**須磨子**

「認知症」という言葉が広く一般に知られるようになって十年も経っていないと思う。

当初は違和感があったが慣れてしまった。

身の回りに見聞きするようになったからです。症の字が付いたので病気の一つと分ってよかったのではないかと思っています。が、いつ誰を襲うか分らないので「魔物」といえるかもしれませんね。

無花果を食はず嫌ひで通しけり　　**多枝子**

名のとおり花をつけない果実とされているが、花軸の肥大成長した花嚢を葉腋に出し、内面に無数の花をつける。石榴・葡萄とならんで世界的に最も古い果実の一つ。

よく熟れたうすい皮を剥くと、細かい種をふくんだ柔らかい上品な甘さの果肉と果汁が口中にひろがります。

つるつるの百間廊下秋日さす　東亜未
木版の槌穴深しこぼれ萩

十月半ば、曹洞宗の大本山、鶴見の總持寺を尋ねた。総受付を通ってすぐ左側を東西に結ぶ「百間廊下」。一日三回修行僧によって磨かれた長い廊下は黒光りして美しかった。

「木版」は諸事を知らせるために打ち鳴らす木製の仏具だが、敷地が広く建物も多いのため力が入るらしく、厚みのある木版の凹みは抉れたように深く、白い木屑がこぼれていた。

お供へに一日暮れたり後の月　桂子

私の子供たちが小さい頃、花瓶に薄を挿して子供がお団子をまるめて月見らしい事をした。

子供たちの言うことを聞いていると時間がかかるので、一日暮れた、ということにもなるかもしれませんね。

にぎやかに雀の潜る蕎麦の花　泰江

いまの家（浦和）に移り住んで二十五年になりますが、以前の大宮は家の前に田畑の広がる掲句のような長閑な所でした。雀が一斉に蕎麦畑に潜って、生りかけた蕎麦の実を啄んでいるのでしょうか。四季を通して種々な作物の実る過程を見て倦きませんでした。

神無月内助の功賞聞きたき夜　寿子

全句が先のノーベル賞を受賞された事への讃美を詠っていらっしゃるので、「ノーベル賞」が入っていない三句の中からいただきました。時局的な事柄を詠むのは難しいですね。

あを吟行会のお知らせ

吟行地　新橋

日　時　1月18日（日）午前11時

集合場所　新橋駅SLひろば　附近

句会場　「えん」（汐留シティセンター42階）

TEL 5537-2096

申込み〆切　11月13日

申込先　篠田純子　03-5250-2776

新年会

1月13日傳句会のあと新年会を致します。

ご参加ご希望の方は1月10日迄お申込みください。

詳細未定

申込先　吉弘恭子　090-9839-3943

月刊 俳句界　2009年2月号

毎月25日発売
定価900円(税込)
定期購読受付中

特集
俳句に著作権はあるのか
◎俳壇のタブー◎
座談会◎俳句表現のオリジナリティー
筑紫磐井・安部元気・中嶋鬼谷・栗林浩・五島高資
論考◎著作権とは…　大高霧海
本歌取りと類句の違い　遠藤若狭男
インターネット上での著作権　さいばら天気

特別作品32句　本宮哲郎

魅惑の俳人たち
14 平畑静塔
新興俳句運動の勃興から「俳人格」まで
▼アルバム・句セレクション
▼作品論　塩川雄三／茨木和生／山口超心鬼

【元気です！中部俳壇】
日本全国俳句列島
「伊吹嶺」「若竹」「耕」「Kō」「年輪」「椎」「貝寄風」「煌星」

対談
佐高信の甘口でコンニチハ！
今月のゲスト　高橋治（作家）

（カラーグラビア）俳句界NOW　河野薫

今月の《巻頭三句》
今瀬剛一・木田千女
浅井慎平・大石悦子
秋尾敏・棚山波朗
倉田紘文・三村純也
山下知津子・野中亮介

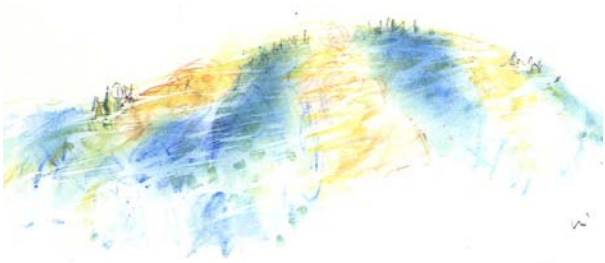
▼デザイン一新!!　誌面が読みやすくなりました!!

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188　FAX.03-5292-9199

冬紅葉の巻

起首　二〇〇七年十二月三日　於中野坂上「ジョナサン」

冬紅葉ぬくみの残る蹠かな　音々
　明日雪吊りの太き縄束　もも
夕さりの烏は田よりつれだちて　竹洗
　池の端手にベンチの一つ　音
月さして最上階の窓が開く　も
　青松虫の鳴ける街路樹　竹
今宵より姉と揃ひの菊枕　不寝
　女だてらに原酒たしなみ　も
サミットのニュース流るるひもすがら　波
　石段石にふつと立ちたる　音
よろめくは高きヒールのせいでなし　唐網
　抱き止められてうれしき吐息　ゑつ
螢沢ゆきの細道かへりの小径　竹
　藍浴衣着て亞刺比亞の月　不
高原の風に吹かれて戻りたる　唐
　犬の首輪を確と結びし　音
花散らす駒もいつしかまぼろしに　竹
　少女はにかみ吹くしゃぼん玉　不



どこまでもスキップで行く春の空　波
タクシー急ぐ行く先羽田　唐
はきものを脱いで上りし舎利殿に　音
　喫煙禁止撮影禁止　竹
七人の侍を観る毛糸帽　も
声を涸らしてゆく寒鴉　不
遺言を考へてゐる雨の夜　波
　をさな友達思ひ出しつつ　ゑ
息を止め瞼とずれば目の前に　唐
　胸の温みを確と感じて　音
高みつついよよ光れる母の月　竹
　秋の夜長に乗る体重計　も
モナリザを廻りゐる列昼の虫　音
　公園にきて子の聲をきく　ゑ
樹は立ちて石は坐りて風はゆれ　竹
　椅子に雀のひょいと飛び来る　音
ふるさとは名残の花と筆便り　不
　土に顔出す二年子大根　唐

満尾

二〇〇八年十月五日　於中野坂上「ジョナサン」

十月の句会

傳　中野区　カフェ傳

敬老日長生きをしてさびしかり　尚子
秋祭見馴れぬ男ばかりなり　敏子
朝寒の手の甲からの目覚めかな　典子
濡縁のいちまいゆるぶ秋の昼寝　喜孝
やや寒し碁石カチリと吸ひ込まる　弘子
木の香たて大根砕く鬼おろし　茂登子
朝の日や柘榴の紅を磨き上ぐ　泰江
つづれさせひと匙づつの看取りかな　純子
ひそやかに木犀の散る石畳　純子
胎動ありて俄に蛹化始まりぬ　裕子
クール便気高き面を秋の鮎　理和
子の影を踏みて佃の十三夜　恭子
秋霜や書院造の小さき灯　綾子
からまつの先細りゆく星月夜　敦子
徘徊でないぞ木犀見にゆくと　藤穂
秋涼や土鍋の埃払ひけり　喜久恵

調　さいたま市 岸町公民館

止まるところ決めかねてゐる赤とんぼ　弘子
諸掘りの屈託なくて泥だらけ　寿子
藪枯らし刈りて貧しきフェンスかな　敦子
屈まればやさしき花よ秋の声　喜孝
秋の風退屈さうな蜘蛛ゆらす　泰江
秋高しくるくる回る風向計　綾子
菩提子の生りゐて届かざる高さ　藤穂

あを吟行会

休　会

七座句会（ほくと）　中野区・小川苑

河馬の口猩々の眉秋深し（まよ）　恭子
つまづいて一人で笑うねこじゃらし　夏子
露けしや言ひたきことが母の目に　純子
鯖雲や網目のごとき人の縁　藤穂
栗鼠走る谷中寺町菊日和　尚子
気を抜けば曲がる背筋やちちろ鳴く　多枝子
浜町で芝居見物秋袷　須磨子
秋うらら靴只今といふかたち　東亜未
語らひにはちきれさうな林檎かな　綾子
言はざりし悔一つありとろろ汁　藤穂
金言のごとくにひらく枇杷の花　喜孝
老獪の白い芒になりすます　木枯
誘はるる深山樒の赤き実や　理和

連句勉強会　一月は休会
希望者は　佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会　1月18日
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

草田男の短冊がどうして私の手元にあるのか分らない。大分前からある。この句は私がペンの試し書きをする時なぜか頭に浮んでくる句。やとけり（ムムム）が一句の中にある禁則技である。橋本夢道はこの句に対して《草田男よ明治は遠くならぬ「君が代」の歌復活》と応へてゐる。本当に懐古ばかりしては居られない。

歌仙が二巻上がった。今月はその中の一つ。連句をやつてゐる時の頭の回転は心地よい。普段使はれてゐない脳の部位が刺激されてゐるらしい。よつて疲れを覚えると活動しなくなる。そのときはデザートを食べる。ファミレスの隅でとぐろを巻いてゐるのでベルを押すとすぐに出てくる。俳句は自己責任で作るのだが、連句は助け合って進めてゆく。先生がゐないので専ら本を頼りとする。あとには心地よい脳の疲労感がのこるだけ。俳句は基本的には一人称。連句はいろいろな人に化けることが出来る。ある時は性を違へる。そこで連句の時は連句用の号をつけやうと提案した。私は屋号の竹僊堂をもじつて「竹洗」、深い意味はない。芝尚子さんは連句友達でもあられた内藤ゑつさんの名をいただいて「ゑつ」。田中藤穂さんは旧姓の一字を使ひ「波」。東亜未さんは東亜未の元である投網を書換へ「唐網」。篠田純子さんは根津に思ひ入れがある。根津には昔岡場所があつたさうだ。私も寝ずに頑張ろうという思ひを込めて「不寝（ねず）」。吉弘恭子さんは好きな歴史上の人物〝ねね〟をいただき「音々」。竹内弘子さんはお孫さんの名前を借用して「もも」。お休み中の安部里子さんは猫が好きなので「猫」。かうあらためてみると「竹洗」は気取りすぎで浮いてゐるやうだ。

（喜孝）

二〇〇八年十二月号

発行日　十二月二十二日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は５句　（作品により添削あり）
「あをかき集」は７句投句。

普通会員　10,000（年間）
インターネット会員（冊子無し）
5,000
連絡先
satou.yositaka@rouge.plala.or.jp

中野区上高田 1-1-1
03-3368-4263